

日本における 多言語教育の必要性とCEFR

日本独文学会教育部会企画シンポジウム「欧
州共通参照枠と日本の複数言語教育」

2008年6月14日於立教大学

慶應義塾大学 境一三

この発表で何を語るか？

- 多言語教育は必要か
 - JA
 - ドイツ語教育の必要性は多言語教育の必要性中で明らかになる(のではないか)
- なんでCEFRがモデルとなるか
 - 共通参照レベルが注目されている、が・・・
 - あえて理念に着目してみる

なぜ今言語教育を語らなければ ならないのか？



- 日本における外国語教育の現状
 - 縦の接合の問題
 - 横の連携の問題
- 多言語・多文化化する社会における望むべき言語話者像の不在
- 言語政策・言語教育政策の不在
 - 学校単位、市町村レベル、都道府県レベル、国家レベル
 - 超国家レベル

日本の言語教育政策をいかに立てるか？



- 日本国内の言語現状
- 東アジアの言語状況
- 理念
 - あるべき社会
 - あるべき教育
- モデルとしてのCEFR

なぜCEFRなのか



- 理念
 - 複言語・複文化
 - 行動中心主義
 - 独自性、アイデンティティーの重視と緩やかな紐帯
- 早期外国語教育の導入と接合の問題
 - 透明性
 - 包括性
 - 尺度の共通化

欧州の外国語教育の変遷



- エリート教育から一般人教育へ
- 教員中心から学習者中心へ
- 古典教育から異文化コミュニケーションへ
- 学校教育から生涯教育へ(ダイナミックな学習)
- 一貫性と透明性の確保
- すべての生徒が母語以外に2言語を学ぶ(1 + 2言語政策)

なぜ多言語教育・学習を行うのか？

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 異なるものを知る喜び(生涯学習のモーター)
- 多言語・多文化共生社会の実現
- 独立国の市民(リーダー)として適切な判断を下す能力を養成する

初等中等教育における多言語教育

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 多言語・多文化共生社会の実現へ向けた準備
- 母語教育を含めた言語教育
- 異文化理解教育
- 外なる他者、内なる他者への気づき
- 言語・文化の多様性への気づき
- 音を楽しむ

大学における多言語教育

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 独立国の市民(リーダー)として適切な判断を下す能力を養成する
- 英語教育の目標をどこに据えるか
 - 大学で「英語教育」は必要か 「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」(コンテンツ教育 行動中心課題解決型学習)
 - 高付加価値化
- 英語以外の言語教育の目標をどこに据えるか
 - いかに高付加価値化を図るか 高い目標設定が必要
 - 高度なアウトプットがなければ社会的に認知されない
 - 初習外国語は実は「初習」ではない 諸言語教育の一体化

まとめ

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- ヨーロッパと日本は異なる: CEFRの直輸入ではなく CJFR/CEAFRを
- 多言語教育の早期導入を
- ドイツ語(フランス語)教育は多言語教育の中で改めて位置づけを